

親鸞聖人に学ぶ

—無我と他力—

瓜生津 隆真

◎目次

一、他力における無我とは……………	2
二、無弟さんの「られ」人生……………	8
三、善き師に導かれる幸せ……………	14
四、如来の大悲に支えられ……………	20

本文中、『註釈版聖典』の引用は「第二版」を用いています。

一、他力における無我とは

『蓮如上人御一代記聞書』(第八十条 註釈版聖典二二五七頁)に、蓮如上人が無我について語られたことを次のように伝えてあります。他力の教えにおいて、無我がどのように説かれているかを見る上に大いに参考になりますので、現代語に直して紹介することにします。

「仏教ではどの教えも無我をかなめとする」と、蓮如上人は仰せられ、さらに「教えについて語り合うとき、われはと思つて争うようなことは少しでもあつてはならない。ところが、自分のをよいと思ひ、私が悪いと思う人はない。このような思い上がりは、ご開山聖人(親鸞聖人)がよろしくないと厳しくお叱りになっていることである」と仰せになりました。とりわけ浄土真宗では他力を説い

ておすすめになるのであつて、決して自己へのとらわれがあつてはならないのです。無我ということは、実如上人もたびたび仰せになりました。

ここに、自分は善いとか、間違っていないとか、と思ひ上がりがある私たちに対して、親鸞聖人はその思ひ上がりを厳しくいましめられている、と蓮如上人がいわれたことを伝えています。そうしてその聖人のいましめが無我を基にしている、自己へのとらわれがあつてはならないというのが浄土真宗の教えであると述べています。

仏教はいずれの教えも無我を説いています。古来、「諸法無我」ということが三法印の一つに数えられているように、無我は仏教を一貫している根本原理で、教えの基本になっています。また初期仏教では、無常と苦とともに、無我ということが随所に説かれています。

無我とは一体何を教えているのでしょうか。むつかしい解説はさておいて、簡単にいいますと「自分にとらわれてはならない」と教えているのだ、と私は理解しています。無我とは一応、我の否定であって、これが基本となつてゐるといふことができませんが、そのことをもう少し考えてみますと、「我」とは自我、すなわち不変固有のものとしてゐる自己（あるいは自己の本体）であつて、この自己が我執の対象となつてゐるのです。その自己にとらわれてはならないというのが、いまいふところの我の否定です。

『聞書』では、教義について語らうとき的心得として、「われ善しとする思いを捨てなくてはならぬといつてゐます。これは無我になることを教えているのであつて、無我になるとは、自我のとらわれを捨てる、自己中心の思いを離れる、つまり何事においても自己にとらわれる心を捨て去ることにほかなりません。

親鸞聖人は「御消息」の中に「われはとらふことをおもつてあらそふこと、ゆめゆめあるべからず……」（第一八通＝同七七五頁）と厳しく戒められています。これは門弟たちが、教義についての意見の対立から自説を主張し合つて、争つてゐることに對してきびしく戒められたのであつて、その争いは「自分はよい、間違つてゐない」といふ自己のとりわれがもととなつてゐる、とそれとされたのです。

ところで、私たちは自分の間違ひや悪いことになかなか気づくことができません。あらゆる執着は、自己のとらわれである我執がもとになつてゐますが、この我執の根は深きところから容易に断ち切ることができなからず、そのために「われ善し」といふ思ひ上がりがなかなか捨て切れなからず、この我執は、無我の原理を知つてはじめて断ち切るべきであらう。